

●すべての人民・同志・友人へ 「対立の根拠は無数だが、団結 する根拠は一つ」

丸岡 修 ①

前略、「人民新聞」5/25号の「コピー」「日本赤軍及び共産同赤軍派の諸君へ」を読みました。その批判にきちんと答えた

いのですが、未だ接見禁止をかけられている為に直接答えられないのが残念です。

きました。日本赤軍が闘争する度に不当なガサ入りの弾圧を加えてきました。なぜなら人新が権力をこびることなく、日本赤軍の投稿を表現の自由としての民主主義的権利を守るために載せてきたことにあります。その意味でもういい加減にしてくれということなのでしょう。このような批判があつて然るべきでしょう。私はあるべきである批判、味方の（広い意味で）誤りに対する真摯な批判だと受け止めていきます。

(1) はじめに

人新（以下「人民新聞」を略し）の批判の趣旨は、①昨年からあまりにも不用意に逮捕されすぎているのではないかと、②その結果多くの人が関係がないのに権力から被害を受けているのではないかと、③日本革命は自分達が指導しなければという思いがあつた考えを持つていないのではないかと、④その性急さ、ごうまんさは日本人民の地道な闘いを無視しているのではないかと、⑤そういつたあたり方を自己批判した七七年の「団結をめざし、団結を求め、団結を武器としよう」とあつた五・三〇声明の趣旨に反するのではないかと、ということでしょう。

俗っぽく言えば「ほんま、難儀やな、帰って来

(2) 私の被逮捕について

対する弾圧の背景としてあります。現憲法下では、暴力革命を唱えようが、具体的行為をもって法令に触れない限り、罰せられたり、官憲による不当な妨害、捜索、拘束

受けないことにはなっています。だが現状は、「革命」罪なる架空の弾圧が存在し、思想、結社、表現の自由を侵しています。

それに対し、人新は大衆とともに地道で精力的に闘ってきたと思えます。その分、今回の権力に対してだけでなく、「日本赤軍並びに共産同赤軍派」に対しての腹立ちになったと理解しています。しかし、私は以下のように是非今回の批判に対して答えたいと思います。

もちろん革命闘争の過程では露顕もし、逮捕もあり、殺されることもありま

す。それに対する覚悟は当然ですが、私たちはあらゆる努力をして、そ

れを防止する革命家としての義務と責任が

あります。そのいみにおいて、被逮捕者自身に

責任を押しつけて

くるのは、私

たちの責任

ではありません。

(3) 家宅捜索について

階級的憎悪は敵権力に

私と同志泉水の名において行われた三〇〇カ所にもはるガサ入れについては、被害者（公安警察が加害者である）の人々に対し、口実にされたことにおいてのみ自己批判します。だがしかし、ガサ入れの本当の根本の原因は、私の「旅券法違反」や同志泉水のそれではないことを断言します。

公安警察の今回のガサ入れの目的は明白で、①「赤軍事件」を口実にし（口実である以上、関係性の裏づけもないし、必要性であれば何でも口実にします）、市民運動、住民運動の実態把握、②これらの運動そのものに対する弾圧、担っている人々に対する弾圧、周辺の人々に対する威圧、③赤軍メンバー捜索、④日本赤軍と大衆の運動との切り離し、大衆からの孤立化、⑤警察国家管理体制の強化、ファッショの促進としてありました。

ソウル・オリンピック妨害を口実にしたこの間の弾圧体制は、私の逮捕や、「よど号」柴田さんの逮捕が契機のように敵

ではありません。元々あつたのです。

今後の闘いを通して、人民、同志、友人達に認めてもらいしかありません。

同志泉水の被逮捕についてもそうです。

因が私でない以上、階級的憎悪の対象は敵権力にむけるべきです。

Kさんから見れば私たちはほとんどない「自己中心集団」でしょうが、敵から見れば、私たちがKさんも同じ警備対象、弾圧対象です。公安警察のリストには、社会党員、共産党員及び支持者から、市民運動、住民運動、中核派、赤軍、在日外国人など、要は社会党員より左は全て同じです。

代々木も反代々木もありません。真に憎むべき相手は私ではなく、権力です。

「沖繩団体」時の琉球での戒厳令（八七年春までは関連市町村の住民動向はすべて調べあげてありましたが）、「極左過激派」の天皇襲撃があるのではという口実ですが、実際は、琉球人民に対する管理強化に結びつけています。それは決して「ニセ」左翼「暴力集団」の「泳がせ」でも「挑発」があるからでもありません。（私が取り調べた）公安の供述によれば、反天皇感情、反日感情ほどの地域が強い

か、その程度、運動化、組織化されているかを琉球で調査していました。異常なファッショ的管理体制は、日米韓軍事同盟関係強化に準じ、ジョン・デュー・ハンの来日決定時から全国的な監視体制をつくってきまし

た。一例をあげれば、日本海沿岸での「職務質問」の嵐、密告態勢の強化はあまりにも有名です。戒厳令下の東京サミ

目的は明白

「沖繩団体」時の琉球での戒厳令（八七年春までは関連市町村の住民動向はすべて調べあげてありましたが）、「極左過激派」の天皇襲撃があるのではという口実ですが、実際は、琉球人民に対する管理強化に結びつけています。それは決して「ニセ」左翼「暴力集団」の「泳がせ」でも「挑発」があるからでもありません。（私が取り調べた）公安の供述によれば、反天皇感情、反日感情ほどの地域が強い

か、その程度、運動化、組織化されているかを琉球で調査していました。異常なファッショ的管理体制は、日米韓軍事同盟関係強化に準じ、ジョン・デュー・ハンの来日決定時から全国的な監視体制をつくってきまし

た。一例をあげれば、日本海沿岸での「職務質問」の嵐、密告態勢の強化はあまりにも有名です。戒厳令下の東京サミ

バチンヨ的管理態勢の強化

そして、今回の異常なガサ入れの背景を特筆します。この間の中核派、共産同戦線派、革労協の諸君による「ロケット弾」闘争に対するガサ入れは、何百カ所に渡って行われており（総計すれ

ば千カ所どころではないでしょう）、中学生時代の友人に対してまでやってきました。四年前には、関西新空港推進派のパーティー会場に抗議文を手渡しに行つただけで、建造物不法侵入として六名を不当逮捕し、寺にまでガサが入りました。今回のガサ入れもその流れが背景にあります。

裁判所の家宅捜索令状の乱発は、八二年に警察庁長官三井脩が「関係法令を積極的に活用し、現行犯逮捕を原則とした厳正な警察措置」を指示したことに照応しています。この指示は、日共を含めた弾圧指示であつて、選挙運動を含め、ビラ張りだけで家宅捜索などをどんどんやるようになっていきます。これが二つめの背景としてあります。

三つめの背景としては、昨年から反原発運動の昂揚があります。それまでは六〇年代の市民運動の延長として、あるいは労働組合（地区）、六〇年安保世代、全共闘世代のシコシコ運動がら

いと見ていたのが、チェルノブイリ原発事故を契機に、地域住民の自覚、婦人達の積極的参加、運動のけん引と、あまりにも急激な人々への広がり

に驚がくし、沈静化の必要性に迫られている事情が権力側にあります。今年四月二六日の閣議で政財界一体となった対処を確認していることに、敵の意図は明白です。RCサクセションの反原発ロケットですら、レコード販売停止、放送（全国キー

（四面へつづく）



「赤軍」批判 —私はこう思う—

日本赤軍及び共産同赤軍派の諸君へ
「赤軍」批判
—私はこう思う—
一九七二年五月のリーグ闘争の直後、そのプロレタリア国際主義として闘いに対し、本来その闘争を支持して当然であるべき旧赤軍派の同志達、一部セクトを除いた新左翼の同志諸君は、連赤の敗北の直後でもあり、非難あるいは無視という状況にありました。その時にあってリッダ闘争の意義を理解し、権力のなりふり構わずの弾圧（私の関連だけで一〇〇カ所以上）のガサ入れ・尋ねも繰り返される人新社に

局F.M東京決定)「自
粛」と、まさにその動き
はファシズムです

「関係ないのに」

では不十分

さらにつけ加えるなら
ば、ガサ入れは「関係性
がないのにやられたのは
問題だ」だけでは不十分
だと思えます。日本赤軍
と関係があれば不当拘
束、不当家宅捜索がやら
れても当然、ではないは
ずです。現憲法は「天皇
制」の存続を認めたブル
ジョア憲法であつても、
思想・信条・言論の自由
など、最低限の基本的人
権は保証しています。現

法令に触れない限り、赤
軍メンバーであつたとし
ても、活動の自由は保障
されねばなりませんし、
関係者だからガサ入れを
れば、(組織) 破防法を

悪質な報道のトップを
走る読売新聞は、「キッ
シンジャー暗殺計画を供
述した」とかデタラメも
流しています。もちろん
「暗殺計画」なるものも
「供述」なるものもデマ
です。

(4) マスコミ報道について

あまのこも

てらこめ

「一部でも事実なら」
は何を指されているかは
わかりませんが、「事
実」は、私や菊村さん、
柴田さんが逮捕されたこ
とが事実です。公安警

察の意図的誇大発表にマ
スコミが尾ヒレをつけて
報道しています。三者が
あたかもヨーロッパ各地
で連携していたかのよう
なデマ報道が流れていま
したが、むしろでたらめ
です。あまのこでたらめ
に、一つ一つ反論を書い
ていきましたが、きりがな
いのでやめました。

テレビ朝日が五月二四
日に衛星中継で、「よど
号」の人たちが「柴田さ
んと私の連携の根拠を示
せ」と言われたことに対
し、公安警察はまともに
答えられず(デマなので
答えようがない)、朝日
新聞夕刊によれば、「彼
らは関係ないと言つて
も、元々はどちらも共産
同赤軍派だったので合流
の可能性はある」という
のが、公安の苦しい言い
訳でした。これ以上の説
明はないでしょう。

あのかつての「アカイ
アカイ」朝日ジャーナル
でさえ、KCIA(現韓
国国家安全企画部)第七
局(世論操作と心理戦担
当)所属の孫忠武のデマ
宣伝に乗っかった破廉
恥記事を乱発しています
(五月二七など)。六月

二四号などでは、酒代欲
しさに左翼の仁義も忘
れ、デマ、ウワサを流す
ニセ「左翼」元「左
翼」腐敗転分子達のニ
セ「情報」を、いかにも
それらしく掲載していま
す。見たようなウソを言
うとはこの腐敗分子達の
ことを言います。まさに
朝日ジャーナルはビービ
ング(のぞき見) ジャー
ナリズムの仲間入りで
す。彼らの「良心」を疑
わざるを得ません。五月
二七号ではかの有名な左
翼の大御所のT氏が「丸
岡は日本の公安大使館員
に北京でキャッチされて
いた。柴田の逮捕は自供
がヒント」と述べている
ようですが、T氏がこの

習ジャーナルの

墮落

「読者の積極的意見・批判を」
五月二五号の一面論文に対し様々な意見
が寄せられています。日本の運動の現状や今
後を考えるための共同討論として、更に多く
の人々の投稿を(編集部)



ユースで初めて知ったの
に自供のしようもありま
せん。
人民新聞でこういうマ
スコミの報道犯罪を是非
暴いてほしいものです。
(つづく)
〔小見出しは編集部〕

「少数の決死隊」による闘いは本当に有効か?

東 拘 植 垣 康 博

大衆闘争とテロリス
ムの区別

実際YSさんは「革
命とは幾千万の人民の共
同の事業」……ではあり
ますが、やはりそうした
「人民」を立ち上げらせ
るには、国家権力(暴
力)に対して闘う少数の
決死隊が必要であり」と
述べ、その理由として
「中流意識」に毒された
「人民」は信頼できない
ことをあげながら、他方
では「ああいう闘いによ
って「革命」情勢が生ま
れるとは断じて思いま
せんけど……」とも述べ
ています。

状況の変化に対応す
る闘い

討ちは、時には政府権力
のぶざまな姿、自己保身
に汲々とした姿、大袈裟
な立ち回りをさらけださ
せ、「人民」に血わき肉
躍る思いをさせ、「国家
権力なんて怖くない」の
意識を広めることでは
う。しかし、そうした革
命情勢を生み出すことの
ない闘いが、どうして
「人民」を立ち上げらせ
ることになるでしょう
か。

「人民」は信頼できない
ことをあげながら、他方
では「ああいう闘いによ
って「革命」情勢が生ま
れるとは断じて思いま
せんけど……」とも述べ
ています。

確かに「少数の決死
隊」と政府権力との一騎

確かに「少数の決死
隊」と政府権力との一騎

それははつきりいえば
マスコミを喜ばせ、マス
コミが報じる一騎打ちを
「人民」がブラウン管の
前で鼻くそをほじくりな
がら高見の見物をさせる
だけのことしかありません
。「少数の決死隊」よ
る闘いが必要ならば、人
民を立ち上げらせる材料
が実際にないならば、こ
んなことをしたって「人
民」は立ち上がりませ
ん。

もう誰もが感じとって
おられると思いますが、
革命運動には高揚期と退
潮期があります。このこ
とは、こうした状況の変
化に対応した闘い方をし
なければならぬという
ことを、私たちに要求し
ています。この闘いを習
得しない限り、私たちは
革命を勝利させることは
できないでしょう。

七〇年の闘いが敗北し
て以降、党派中心の運動
は衰退し、現在それにか
わって新たな運動が、基
地問題や原発問題や自然
保護問題等々の、様々な
問題を通過して成長しつ
つあります。このような時

国家テロとの対決は
必至

もつとも、今は、反革
命権力がテロに訴えてい
る時代です。アメリカ軍
のリアパ爆撃を口実とす
るための、西ドイツでの
ディスコ爆破事件をはじめ
めとする、ヨーロッパで
のあやしげな爆弾事件や
テロ、昨年の米日「韓」
一体となった大韓機行方

不明事件、そして先のチ
ュニジアにいたPLO幹
部アブ・ジハード氏の暗殺
事件でも見つけたイス
ラエルの国家テロ、アメ
リカ軍によるイラン航空
機撃墜事件。その他、フ
イリピンや中南米でのテ
ロの横行を指摘すること
で充分でしょう。

あなたたちの生きざまを
こそ伝えてほしい

大阪・M

世界の各地で生きる同
志たちへ。
あなたたちの生きざま
を伝えるニュースを発行
していただきたい。アラブに
行った人たちからは、最
近はほとんど何も聞きま
せん。作り事や邪推を含
めた警察とマスコミの情
報だけです。朝鮮に行っ
た人からも「日本を考

どまらず、どこの国にお
いても、社会主義国でも
同じでしょう。本当に人
民が権力を握り、権力を
止揚するために、あなた
たちは日本を離れたのだ
と思えます。世界人民の
力で日本の権力をつぶす
ために。

ももちろん、具体的な行
為や今後のスケジュール
について公表できない
かもしれませんが、もし
あなたの方の考えや、普
遍的な成果については、世
界の仲間、日本の仲間
に知らせたいと思
います。

日本の権力は、相当な
情報を握っています。し
かし、私たちは知りませ
ん。ましてや、日本で普
通に生活する人にとって
は、警察・マスコミ情報
しかないし、あたり前の
こととして受けとめてい
ます。いくら正しいこと
をしても、普通の人には
伝わらないのです。
私は、ホノネのあなた
たちの言葉を聞きたい。
何をしてくれて、何をし
てくれているか。まわりの人はど
うか。今、何を考えてい
るか。このことをはつき
りと言うことが、日本の
人々へ、世界の人々へ迫
る道だと思えます。

人民新聞学習シリーズNo.1

全民労連の根元を問う

高島喜久男著

300円(〒120円)

本紙3回連載の講演と質疑が一冊のパンフレットに!

申込は人民新聞社

大阪市北区天満橋 3-5-28
天満橋会館 2 F Tel 06-358-4376
郵便振替大阪 5-88555

●すべての人民・同志・友人へ 「対立の根拠は無数だが、団結 する根拠は一つ」

丸岡 修 (2)

「(5)「疑問・不信を解決すべき」に関して

「公安発表には誇張・推測が

(1) 「明らかに権力にマークされている丸岡氏がなぜ各国を」
マークされたのは私の使用旅券であり私ではありませぬ。それも直前で。本名は確かに国際手配されていますが、もちろん本名で移動はしないし、人相だけでは公安も特定に二日かかっていません(人新の疑問の基本的な手配されている人がわざわざ日本に出入りする冒険は避けるべきだ。日本のことは我々に任せるべきだ、自分達でないとダメだ)と思うのは自己中心的だということでしょうが)。

「なぜ各国を」——遠まらなければバレなかつたでしょう。それに公安——マスコミ発表には誇張、推測があることをお忘れなく。

(2) 「広大なアメリカに少数の人々が……」
菊村さんが爆弾を使おうとしていたというのはFBIの発表でしょう。断定することはできないと思います。彼と日本赤軍を結びつける具体的証拠は何も出ていません。菊村さんが実際に爆弾を持っていかどうかはわかりませんが、その件と切り離した上で、ここでは米帝に対する闘争の意義について述べてみたいと思ひます。一般的意義については……

世界中の多くの革命勢力が反米闘争を展開しています。手段、方法は様々です。パレスチナ革命勢力、イスラム革命勢力を始めとした武装闘争を軸にした闘い、それはヨーロッパ(西独、仏、ベルギーなど)においても中南米、アジアにおいても、米帝を直接の敵として自国内米帝軍基地、米兵に對した闘い、国際遊撃戦として国境を越えた闘いを展開しています(反米の実力闘争がないのは日本位です。在日米軍の規模はアジアで最大であり、世界ではNAT

的な準備が必要であり、その準備は実践を通してしか発展しません。その戦略的意図性、持続性、人民性をもって初めて、武装闘争は一回性の自己満足ではなく戦略問題(戦略的位置)としての遊撃戦(ゲリラ戦)になります。故に個々の軍事作戦が目標正しくサポートージュとして勝利的に遂行される限り、それは無計画な、せつな的な、自己中心的な闘いにはなりません。

米帝のテロ行為は、先日のイラン民間航空機撃墜(日本政府はかつて大韓機撃墜、行方不明に對し、それぞれ異なる準備を講じた)に放、あるいは人民政権に對する干渉に對しては、人民の意志と武装力が必要です。人民総武装は成り行き、自然発生のままでは果たしえず、目的意識的部分による目的意識

反「テロ」キャンペーン、反「テロ支援国家」キャンペーン(八五年にイラン、リビア、チヨン、ニカラグアの四カ国を特に名指し)として展開しています。国家に對しては包圍孤立化、個別撃破、反革命テロリスト達への軍事、経済支援(ニカラグア、アングラアフガニスタンなど)を行い、民族民主革命勢力に對してはその国、地域の反動政権に對する軍事経済支援、対ゲリラ戦軍事顧問派遣、「戦略」村の形成など(フィリピン、エルサルバドルなど)を行っています。レオン政権は実行部隊としてのSOP(特殊作戦部隊)の存在などを八五年に明らかにしています。デルタ・フォーセスはその一つです。ソ連を中心としたワルシャワ条約機構国の一致した平和攻勢の前に米帝の軍拡路線は抑えられようとしていますが、S、D、IとL、C、Wの強化を遂に計つて

し、それぞれソ連と中国に對して不当な制裁措置をとったのだから米帝に對しても行うべきである)、八六年のリビア無差別爆撃、八三年のグアナダグワラ、八六年レバノン進歩勢力に對する無差別砲撃など暴虐の限りを尽くしています。第二次世界大戦後、相次ぐ社会主義諸国の成立、民族解放闘争、労働者階級の闘いの発展は、帝国主義を制約し、世界帝国主義は帝国主義間競争の中で色褪せるところか、現実性をますます増しています。

反「テロ」キャンペーン、反「テロ支援国家」キャンペーン(八五年にイラン、リビア、チヨン、ニカラグアの四カ国を特に名指し)として展開しています。国家に對しては包圍孤立化、個別撃破、反革命テロリスト達への軍事、経済支援(ニカラグア、アングラアフガニスタンなど)を行い、民族民主革命勢力に對してはその国、地域の反動政権に對する軍事経済支援、対ゲリラ戦軍事顧問派遣、「戦略」村の形成など(フィリピン、エルサルバドルなど)を行っています。レオン政権は実行部隊としてのSOP(特殊作戦部隊)の存在などを八五年に明らかにしています。デルタ・フォーセスはその一つです。ソ連を中心としたワルシャワ条約機構国の一致した平和攻勢の前に米帝の軍拡路線は抑えられようとしていますが、S、D、IとL、C、Wの強化を遂に計つて

を計っており、米帝を中心とした世界帝国主義体制を形成しています。米帝のペルシャ湾(アラビア湾)軍事支配は欧日帝国主義の支援の下に行われていきます。世界帝国主義の擬制の一元性に對し、味方の一元的な反米帝の実力闘争はプロレタリア国際主義の闘いとしてあります。同志チェ・ゲバラの「第二、第三のベトナムを」のスローガンは国際階級闘争の中では色褪せるところか、現実性をますます増しています。

ここで菊村さんの話にもどりますが、菊村さんがどのような意図で「爆弾」を持っていられたのか、私にはその事情はわかりませぬ。米帝国主義者に何らかの闘いの意志を持っていられたのであれば、私は断固として彼の行為を支持します。

「公安発表には誇張・推測が

「(3) 「なぜ中曾根に手紙をだし、帰国を懇願する

「(4) 「なぜ中曾根に手紙をだし、帰国を懇願する

「(5) 「疑問・不信を解決すべき」に関して

「(6) 私がなぜ帰国したのか

「(7) 私がなぜ帰国したのか

「(8) 私がなぜ帰国したのか

「(9) 私がなぜ帰国したのか

「(10) 私がなぜ帰国したのか

「(11) 私がなぜ帰国したのか

「(12) 私がなぜ帰国したのか

「(13) 私がなぜ帰国したのか

「(14) 私がなぜ帰国したのか

「(15) 私がなぜ帰国したのか

「(16) 私がなぜ帰国したのか

「(17) 私がなぜ帰国したのか

「(18) 私がなぜ帰国したのか

「(19) 私がなぜ帰国したのか

「(20) 私がなぜ帰国したのか

「(21) 私がなぜ帰国したのか

「(22) 私がなぜ帰国したのか

「(23) 私がなぜ帰国したのか

「(24) 私がなぜ帰国したのか

「(25) 私がなぜ帰国したのか

「(26) 私がなぜ帰国したのか

「(27) 私がなぜ帰国したのか

「(28) 私がなぜ帰国したのか

「(29) 私がなぜ帰国したのか

「(30) 私がなぜ帰国したのか

「(31) 私がなぜ帰国したのか

「(32) 私がなぜ帰国したのか

「(33) 私がなぜ帰国したのか

「(34) 私がなぜ帰国したのか

「(35) 私がなぜ帰国したのか

「(36) 私がなぜ帰国したのか

「(37) 私がなぜ帰国したのか

「(38) 私がなぜ帰国したのか

「(39) 私がなぜ帰国したのか

「(40) 私がなぜ帰国したのか

「(41) 私がなぜ帰国したのか

「(42) 私がなぜ帰国したのか

「(43) 私がなぜ帰国したのか

「(44) 私がなぜ帰国したのか

「(45) 私がなぜ帰国したのか

「(46) 私がなぜ帰国したのか

「(47) 私がなぜ帰国したのか

「(48) 私がなぜ帰国したのか

「(49) 私がなぜ帰国したのか

「(50) 私がなぜ帰国したのか

「(51) 私がなぜ帰国したのか

「(52) 私がなぜ帰国したのか

「(53) 私がなぜ帰国したのか

「(54) 私がなぜ帰国したのか

「(55) 私がなぜ帰国したのか

「(56) 私がなぜ帰国したのか

「(57) 私がなぜ帰国したのか

「(58) 私がなぜ帰国したのか

「(59) 私がなぜ帰国したのか

「(60) 私がなぜ帰国したのか

「(61) 私がなぜ帰国したのか

「(62) 私がなぜ帰国したのか

「(63) 私がなぜ帰国したのか

「(64) 私がなぜ帰国したのか

「(65) 私がなぜ帰国したのか

「(66) 私がなぜ帰国したのか

「(67) 私がなぜ帰国したのか

「(68) 私がなぜ帰国したのか

「(69) 私がなぜ帰国したのか

「(70) 私がなぜ帰国したのか

「(71) 私がなぜ帰国したのか

「(72) 私がなぜ帰国したのか

「(73) 私がなぜ帰国したのか

「(74) 私がなぜ帰国したのか

「(75) 私がなぜ帰国したのか

「(76) 私がなぜ帰国したのか

「(77) 私がなぜ帰国したのか

「(78) 私がなぜ帰国したのか

「(79) 私がなぜ帰国したのか

「(80) 私がなぜ帰国したのか

「(81) 私がなぜ帰国したのか

「(82) 私がなぜ帰国したのか

「(83) 私がなぜ帰国したのか

「(84) 私がなぜ帰国したのか

「(85) 私がなぜ帰国したのか

「(86) 私がなぜ帰国したのか

「(87) 私がなぜ帰国したのか

「(88) 私がなぜ帰国したのか

「(89) 私がなぜ帰国したのか

「(90) 私がなぜ帰国したのか

「(91) 私がなぜ帰国したのか

「(92) 私がなぜ帰国したのか

「(93) 私がなぜ帰国したのか

「(94) 私がなぜ帰国したのか

「(95) 私がなぜ帰国したのか

「(96) 私がなぜ帰国したのか

「(97) 私がなぜ帰国したのか

「(98) 私がなぜ帰国したのか

「(99) 私がなぜ帰国したのか

「(100) 私がなぜ帰国したのか

「(101) 私がなぜ帰国したのか

人民新聞が紙面上で繰り返してきている「赤軍批判論争」は、その論争のポイントが相当に枝葉末節のところにズレてしまっ...

「国境」へのこだわりは、日本人民大衆への不信頼

大阪・M

「赤軍批判」の論議で批判の中心が、赤軍メンバーの被捕とそれを口実に権力が強行している...

海外にいる彼らの考え方の決定的な誤りは「日共」の真意を極め、本革命への真意を極め...

「赤軍」批判 一私はこう思う (8) 丸岡修 丸岡修と人民の位置が逆転して...

政治思想的な問題 第二に、人民権力樹立にいたるまでと樹立後、その時々に党が軍事問題...

「すべての人民・同志・友人へ」 対立の根拠は無数だが、団結する根拠は一つ

(3)

団結をめざし、団結を求め 団結を武器として

丸岡修 丸岡修と人民の位置が逆転して...

丸岡修 「赤軍」批判 一私はこう思う (8) 丸岡修 丸岡修と人民の位置が逆転して...

政治思想的な問題 第二に、人民権力樹立にいたるまでと樹立後、その時々に党が軍事問題...

自供敗北の 総括 七七年の五・三〇声明の逆提記を人新から受け...

丸岡修 丸岡修と人民の位置が逆転して...

丸岡修 「赤軍」批判 一私はこう思う (8) 丸岡修 丸岡修と人民の位置が逆転して...

政治思想的な問題 第二に、人民権力樹立にいたるまでと樹立後、その時々に党が軍事問題...



